

冬季五輪研究プロジェクトとは

1998年の長野冬季五輪の開催から11年が過ぎました。2010年2月には、カナダのバンクーバーで冬季五輪が開催されます。90年代以降、オリンピック開催都市は環境保全にも目を向けるようになりました。その流れの中で、長野オリンピックは「美しく豊かな自然との共存」という大会基本理念を掲げ、20世紀最後の冬季五輪大会を華やかに開催しました。

私たちは、大会から10年後という節目にあたる2008年度に、長野五輪で試みられた様々な自然保護対策の効果等について調査を行い報告書にまとめました（「長野冬季五輪から10年後の自然保護対策における現状と課題」56ページ）。これは、2001年に公表した冬季五輪に関する中間報告書を基礎に、その後のデータを加えた総合的なとりまとめになりました。過去の五輪史上、開催から10年後に至るまで、環境への影響等について追跡調査を行い、その結果がまとめられた例はないと思います。様々な自然保護対策には、うまくできたこともあれば、課題を残した部分等もありました。報告書では環境五輪を目指した長野の経験が、今後の事業や環境配慮によりよく生かされるようにとの期待をこめ、対策効果の確認とともに、課題となった点についても詳しく報告しています。

調査の内容

長野冬季五輪に関する調査研究は、環境保全研究所の前身の自然保護研究所が、1997年度に開始した研究プロジェクトです。2008年度は、それまでにすでに課題とされていた部分を中心に新しく6つのサブテーマを設け、1年をかけて調査しました。テーマは以下のとおり。

- ① 表土復元箇所等のモニタリング（白馬村・山ノ内町）
- ② 猛禽類への影響と現状（白馬村）
- ③ 白馬村中畔沢と山ノ内町カッパ沢のその後
- ④ ギフチョウ生息地の保全対策の現状と課題（白馬村）
- ⑤ 志賀ルートに設置されたエコロードのその後
- ⑥ 主要な屋外競技施設や競技コース等のその後と現状（白馬村・長野市・野沢温泉村・山ノ内町・八方尾根上部地域）

調査対象は山林開発をともなった5つの屋外競技施設と7つの関連施設、そして白馬村の1地域（とくに猛禽類について）としました。各テーマの結果については、次ページ以降に順に報告します。以下は、それらの結果をもとにした全体の総括です。

長野冬季五輪と環境保全

長野五輪における環境配慮の最大の特徴は、野性生物の保護保全対策を中心に置いた点にあります。これには、冬季五輪史上最南の北緯37度という地理的な位置と、複雑な地形と地史、そして多様な生物相に恵まれた長野の自然環境が大きく影響しました。

＜評価されたこと＞

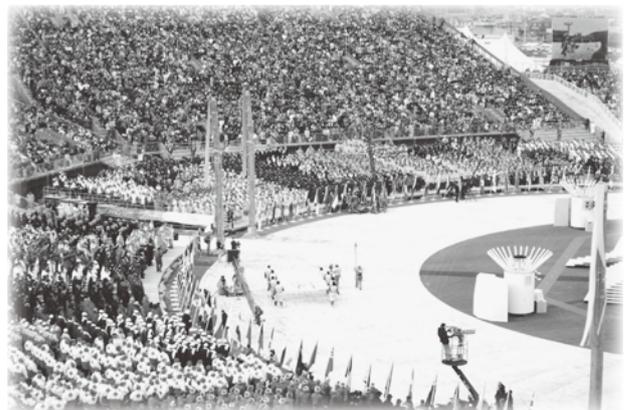
- ・多種多様な自然保護対策メニューの充実
- ・表土復元等にみられる対策の一定の効果
- ・五輪後の八方尾根上部における自然保護対策の進展＜課題とされたこと＞
- ・自然環境の保護のための長期的・総合的な対策と管理
- ・希少植物の移植対策等における、経過監視とその後の適切な評価
- ・環境アセスメントにおける技術的な課題（とくに水関連事象における予測評価）

長野冬季五輪が残した財産と教訓

長野冬季五輪は私たちに以下の財産と教訓をのこしました。

- ① 『様々な自然保護対策の実績』 その技術と経験を次世代に伝え、今後も可能な限り活用されなければなりません。
- ② 『戦略的環境アセスメントの重要性』 大型プロジェクトでは、基本計画が練られる早い段階で、代替案を含む総合的な観点による環境配慮の実施が望まれます。
- ③ 『プロジェクトの企画・運営と自然保護対策の一元化』 自然との共存を確実にするために必要です。
- ④ 『環境配慮を共通の視点で管理し統括する仕組み』 準備から実施後のモニタリングまでを確実に行うために必要です。
- ⑤ 『長期のモニタリング』 主要な自然保護対策の検証には、少なくとも実施後10年以上にわたるモニタリング調査の継続が望ましいといえます。

「美しく豊かな自然との共存」という基本理念は、長野が21世紀の世界に向けて力強く発信したメッセージでした。基本理念の本当の実現は、当時の思いが継承され、今後新たな自然保護の取り組みや環境保全策を通して育てられてゆくかどうにかかっています。10年前の長野に点った環境五輪の火は、これからも燃やし続けていかなければならないと思っています。



※報告書の内容は研究所のホームページでご覧いただけます。
→ <http://www.pref.nagano.jp/xseikan/khozen>